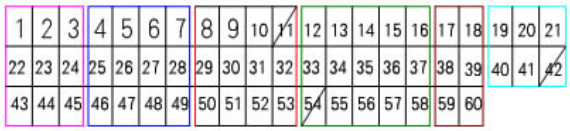
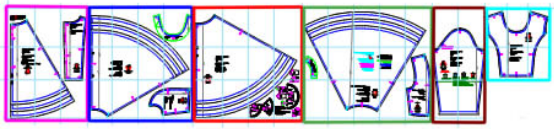
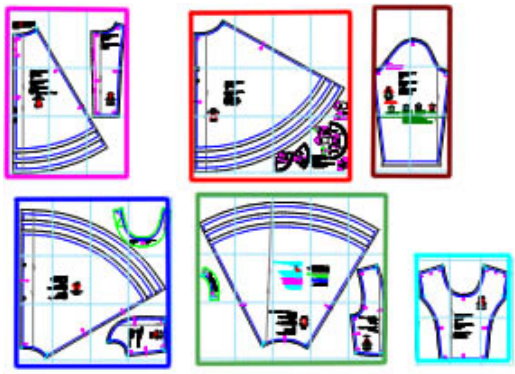


貼り合わせ図

洋裁工房の型紙はこのように貼り合わせ図というのが描かれています。
大判印刷の型紙は、１枚に収まるものは書かれていないものがあります。



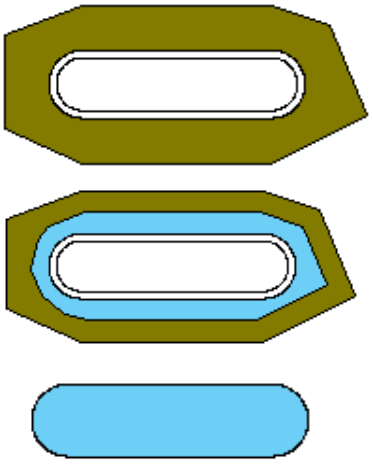


隙間が開いているもの、色分けされているものは一まとまりが１つのパーツと思って貼り合せてください。
全部一気に貼り合せると広い場所が必要になるので、あらかじめ一塊になったパーツごとに分けて貼り合せると、作業が楽になります

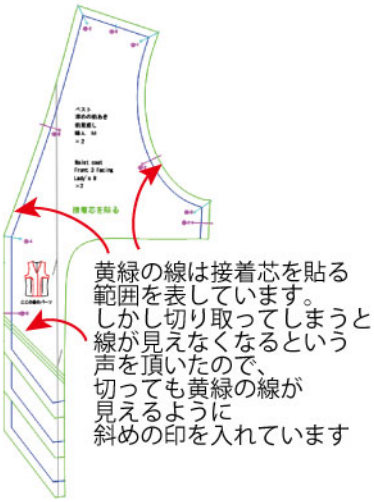
１）

２）

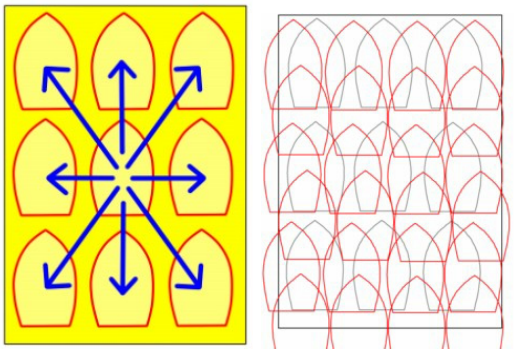
３）



接着芯の貼り方。

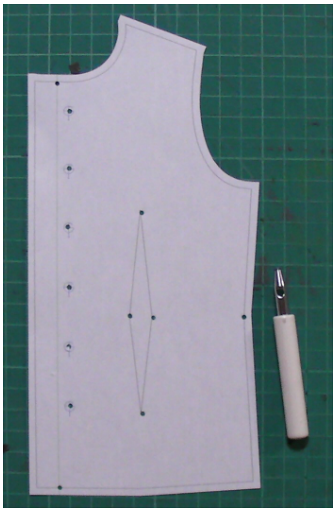


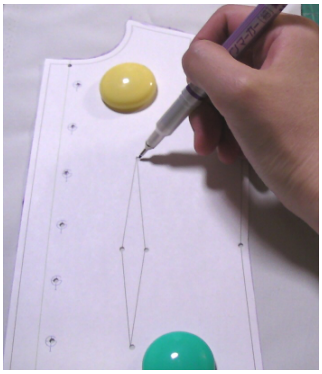
１）　型紙より大きめに生地を粗く切り出す。
２）　同じく型紙より大きめで、生地より小さめに接着芯を切り出し、アイロンで接着する
アイロンの温度は中温で、5～20秒ほど体重をかけて圧着させる。
圧力と温度と時間が足りないと剥がれてきます。
３）　充分さめてから切りだす。
切るときは、チャコペンなどでなぞった線の内側を切ること。
型紙の外側に線を引くのですから、その線の外側を切ったりすると、下手をすれば2mmくらい大きくなってしまいますからね。



接着芯をかける時は、端から順番に圧着していくとゆがんでしわが出来たりしやすいので、中心から放射状にざっくりと接着する。
まんべんなく圧力をかけて全体を接着させる。
アイロンの温度は中温で、5～20秒ほど体重をかけて圧着させる。
この時隙間があると洗濯した時に、その部分がはげてきたりするから、しっかり接着させる。

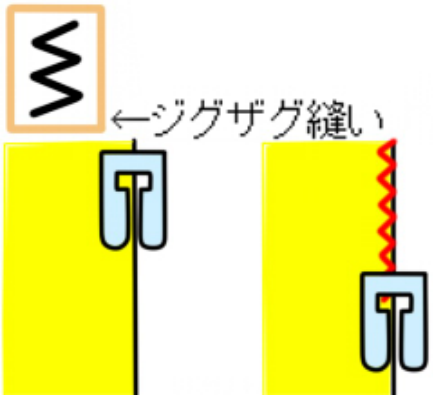
なでるようにアイロンをかけると、接着芯が伸びて型崩れするので、アイロンの位置を変える時は持ち上げて移動させる。



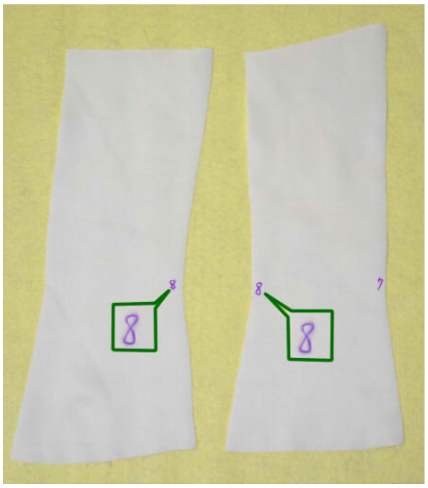


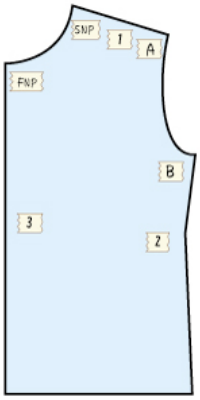
生地に柄をや印を写す。
ポンチや目打ち、不要になったミシン針等で型紙に穴を開けます。
その穴からチャコペンで、印を写していきます。
ボタンなどの印は表から、ダーツなどは裏からつけた方が分かりやすいですよ。
チャコペンの印が付きにくい生地の場合や、プリーツスカートや袴もどき等、裏と表両方から印が見えた方がいい場合は切りじつけで印をするといいですよ
切りじつけの仕方

この時、縫い位置合わせの切り込みも入れておきましょう（脇やそで山等、位置を合わせるための印、表に見えないように、縫い代の中5～8mm程度切り込みを入れておきます。



裁断した全てのパーツの端をほつれ止めをしてください。
←は家庭用ジグザグ縫いでのほつれどめの仕方。
布の端が押さえがねの真ん中にくるようにします。
右側に針が落ちるときに、布からはみ出るようにジグザグで縫っていきます。
こうするとはみ出た部分が布の端を包んでくれてほつれませんよ！

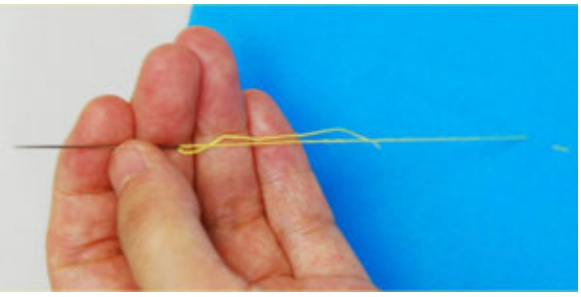


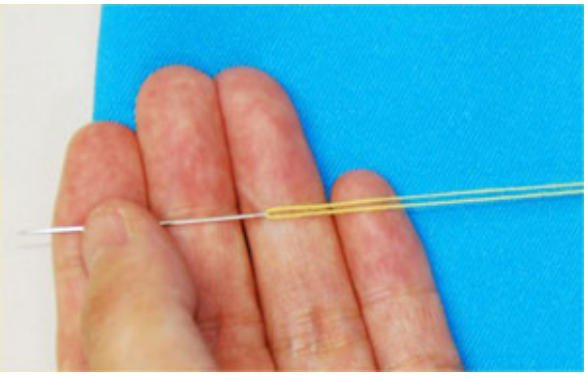


ぱっと見ただけでどのパーツか混乱しやすいものは、縫い代にチャコペンで直接書いたり、マスキングテープに番号を書いて貼っておくと後で縫い合わせる場所かすぐにわかって便利です。
同様に裏表が分りにくい生地とかも縫い代などに裏と書いておくと悩まずにすみます。

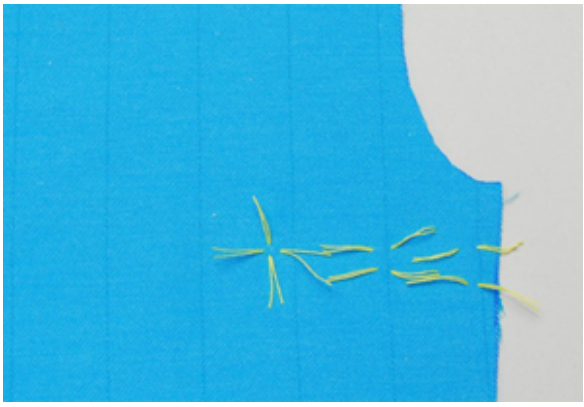
仕付け糸によるしるしの入れ方

プリーツスカートやダーツ(立体にするためのつまみ)など両面からしるしを確認したいときに特に便利

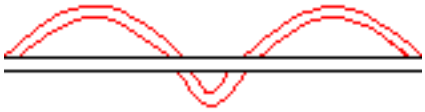




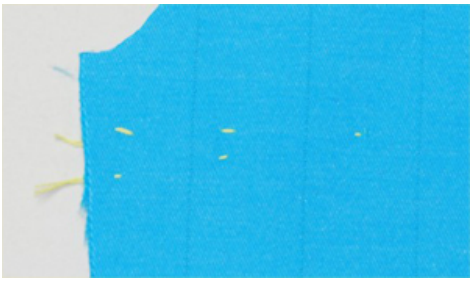
手縫い針で生地を縫うとき、1本どりと2本どりという方法で糸を使う方法があります。
1本どりは、糸の片端を玉結びして、1本の糸で縫って行く方法。
　2本どりは、糸の両端を一緒にまとめて玉止めして、2本の糸で生地を縫って行く方法です。
　今回しつけ糸は2本どりの方を使います。
　ただし、切りじつけで使用した糸は、後ですべて抜いてしまうので、玉止めはしません。



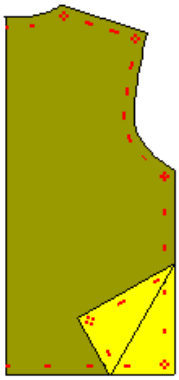
印、といってもすべてを写さなくてはいけないわけではありません。
このようなダーツ（立体にするための布のつまみ）の所は、長さにもよりますが
縫うための基準となる、端と頂点、長ければ途中に1～2か所一針づつ縫っておきます
図のようにダーツや縫い代など、印があると分かりやすい所にゆるく仕付け糸を縫って行く。

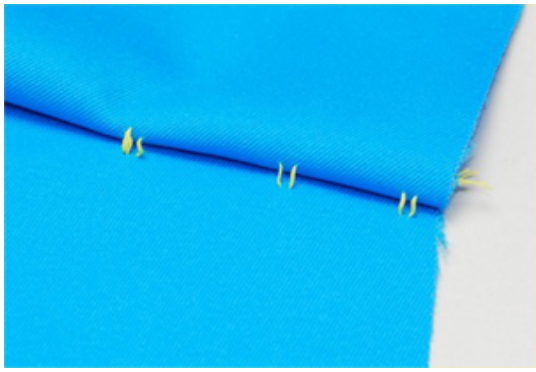


断面図



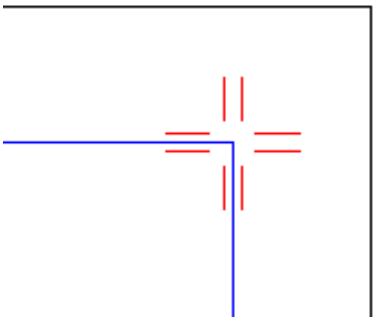
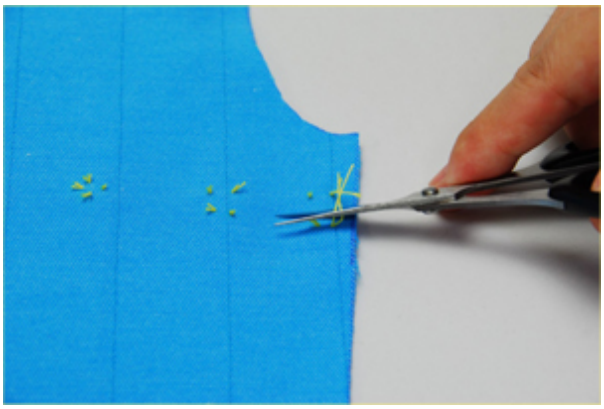
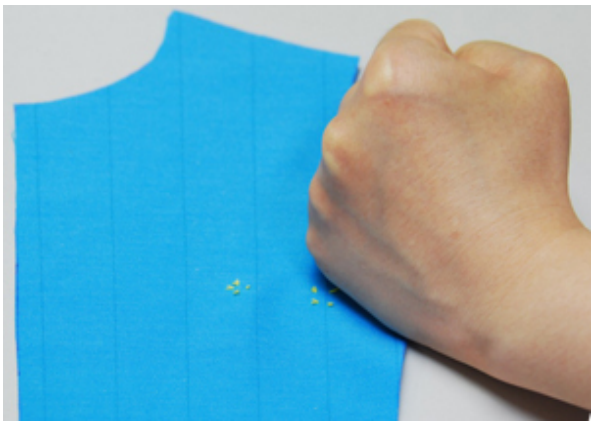
裏側





だいたい布を切るときは2枚重ねて左右対称にとることが多いと思います。
このように上側を、しつけ糸が抜けない程度によけておきます

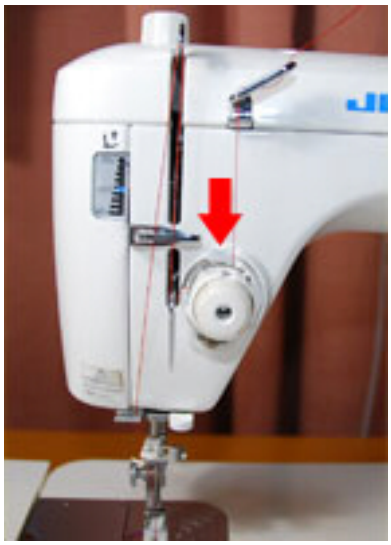
間の糸を切ります。

	角はこのように十字に交差させて間を切ります。
   	抜けない程度に糸を残し、余分をカットする。 あとは邪魔にならないように叩いたりアイロンで倒しておいてください。 しつけが必要なくなったら仕付け糸を抜くだけでよいので、生地へのダメージも少なく、あとが残らないので良いですよ！

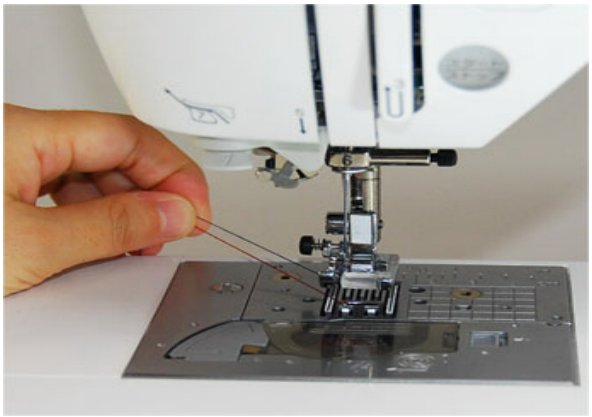
ギャザーの寄せ方

	ミシンの縫い目の長さを長くする。 だいたい1針分の長さが3～4mm程度にする。

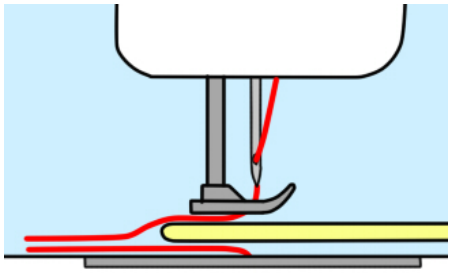
ミシンの上の糸の糸調整を弱くする。



糸調整をするための調整器はミシンによって異なります。
ダイアル式のものは左に回すと弱くなり、デジタルのものは「弱く」もしくは「－」と書かれたボタンを押すか、タッチパネルを押すことによって調整できます。



縫い始めは糸が抜けないように、ミシンの後方へ上下の糸を長めに（6～7cm位）出しておいてから縫い始める。

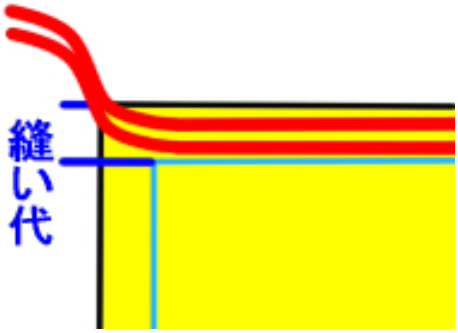


図A

図B

通常は図Aのように糸調子が布の間でつりあった状態が綺麗といわれますが、
あえて上の糸を弱くすると、上の抵抗が弱いため下に糸が引っ張られ図Bのようになります。
これによって下の糸が引き抜きやすくなります、それを利用して布を縮めます。

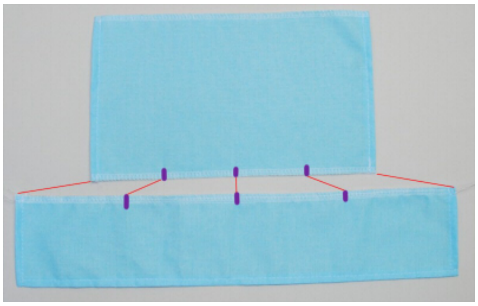
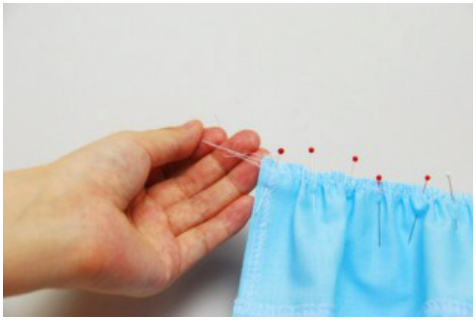
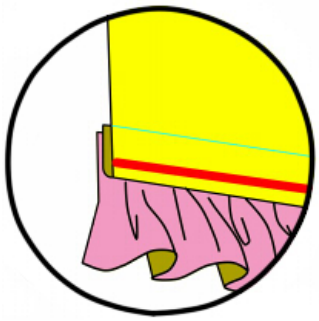
縫い終わりも長めに糸を残す。
（糸を引くための持ち手にするため）



縫い代の中を2本縫います
1本より2本縫ったほうがギャザーが均等に寄せやすいです。

そして下糸（裏側）だけを引っ張ると、ギャザーが寄って行きます。

ギャザーを入れるときは面倒でも2本入れておくと綺麗にギャザーが寄せられます
1本だけだと布端がそろわずガタガタになります。
なのでスカートのすそに縫いつけて完成した～と思ったら、表に端がはみ出ていた！なんてことがあったりしますよ。

 	フリルを縫いつけるときはこのように同じ数だけフリルとフリルを付ける土台になる方に均等に印を入れておきます 印同士をあわせてピンでとめます
	ギャザーを寄せるために裏側の糸2本だけを引っ張ります。 この写真だと裏を上にしているので上側2本です。 わからなくなりそうな方は、下か上のどちらかの糸の色を変えておくといいですよ。
	内側同士が表になるように表同士が内側になるように重ねてミシンで縫ってください。
	フリルを起こして土台側に縫い代を倒して、土台と縫い代を一緒に表からミシンでぬいます **ギャザーを入れ終わったら忘れずに糸調子と縫い目の長さを元に戻しましょう。**